

---

# **高機動幻想ガンパレードマーチ～風を渡る悪の親玉(ラストボス)～**

自称魔法使い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高機動幻想ガンパレードマーチ～風を渡る悪の親玉～ラストボス

### 【Zコード】

Z7464X

### 【作者名】

自称魔法使い

### 【あらすじ】

前回、投稿していた【高機動幻想ガンパレード・マーチ～風を渡る正義の武装探偵～】が作者が色々な事をさせたいと入れすぎて結果的に主人公のキャラがぶれまくつたりすると言つ、大事故が起こりました（泣）

そこで、きちんとした物語構成を作る為に、リニューアルしますー！  
また、作者は懲りずに無計画ですけど…（汗）

なので、感想やこうした方が良いよ？などアドバイスもドンドン下さい

出来れば、内容以外で…（笑）

## プロローグ（前書き）

とこりわけで、プロローグです  
短いですが、どうぞ（笑）

## プロローグ

「…………さて、行くか…………」

まんまるい満月が昇る夜

大きな屋敷の中庭で一人の背の低い少年が呟いた

頭に被つた猫の耳の様な形をした黒いニット帽が月明かりに照らされている

「もう、ここには居られないからなあ……まあ、仕方がないか……」

少年は自嘲する様に悲しく笑みを作ると、そつと中空に指を奏でる

「…………」

少年を中心に難解な文字が刻まれた陣、魔方陣が広がる

「…………私に黙つて行く氣?」

『つー?…………ふみー?』

バツと後ろを振り変えると、そこには桃色の髪に眼鏡をかけた美女と言つてもいい女性【萩ふみこ】が不敵な笑みを浮かべていた

「…もつ一度聞くわ、私に…私達に黙つて行く氣？」

こちらを真っ直ぐに見つめてくるふみこに少年は苦しそうに視線を反らす

『…………俺は、【アイツ】にとつて仇だ…。これまで通り、元気居る』とは出来ない……』

「…………あの子が…【光太郎】が本当にあなたの事を仇だと思つてゐるの?」

その言葉に少年は視線を反らし俯いた顔を上げる

そこには、先ほどまでの苦しそうな表情はなく、ざぶとなく優しく笑いを浮かべていた

『ハハッ…、そうだな。アイツは馬鹿だから多分そんな事、少しも思つてないだろ?』

「なら、『けど…』…」

ふみこの声を遮った少年の耳にはある種の決意が見てとれた

『多分、アイツが帰つて来たら、今よりもっと強くなつてる様な気がするんだ』

少年は、雲一つ無く小さな星が輝く空を懐かしげに見上げながら葉を紡ぐ

『だから、俺も行くよ…、強くなるために、俺が俺であるために、そして…………【ケジメ】をつけるために…』

少年は、空を見上げていた視線をふみこへ戻し、笑みを浮かべる

『だから……………【行つてきまゆ】だ』

それは、苦しみや悲しみを一切感じさせない清々しいまでの笑顔だった

「…………せひ、なら私はあなたを送り出すだけよ…」

ふみこが少年がやつたものと同じ様に中空に指を這わせる

少年を中心に淡く青色に発光する魔方陣が形成される

『…………ふみこ』

「…………なに?」

細く白い指先は、中空を軽やかに踊る事を止めない

『…………えつと、その、な……』

淡い青色の発光は更に強く、魔方陣も大きくなつていく

『……………ありが、とな……／＼／』

「……………」

一瞬、本当に一瞬、中空を踊つていたふみこの指がピタッと止まつた

「……………気にすることはないわ」

フツとふみこは口許に笑みを浮かべながら答える

魔方陣が一層輝きを強めると、ふみこは中空で踊つていた指を下ろした

「第5世界に繋げたわ。逝つてきなさい」

『…………なんか不穏なものを感じたんだが…（汗）』

氣のせいよとふみこは、クスクスと笑う

『ん~…、まあ良いか。じゃあ、行つてもますーー!』

少年は片手を上げて別れを告げるとあっさりと、拍子抜けする程あつさつと【迎えた】

少年が消え、魔方陣が消えた中庭で、ふみこはただジックと魔氣に光る満月を見上げる

数分後、そつと踵を返し屋敷へと戻っていく

「……あなたは【光太郎】と同じくらい良い男なんだから、ちやんと帰ってきてなきなことよ……」

そつと、もついの世界には居ない少年へと駆け

「……こつてうりしゃい、【如月クオン】。イヤ、【自称・悪の親王】やん…」

## プロローグ（後書き）

…………最早、主人公の名前以外は全くの別物ですね（苦笑）

次回ものらつらつと書いていきます

## オリ主紹介（前書き）

というわけで、2日連続投稿できました…（汗）

今回は、主人公の紹介ですのでメッサ短いです（笑）

それでは、どうぞ

## オリ主紹介

如月クオン  
あづまクオン

年齢：18才

身長：160cm

体重：50kg

好き：悪、イタズラ、睡眠、鮭の塩焼き

嫌い：なんちゃって正義

オーマネーム：赤にして悪

異能：空間倉庫

容姿：紅くサイドと目の中の髪を伸ばした髪型。髪と同じく紅い瞳でややツリ目でそこそこ美形。常に猫の耳の様なトンガリをした黒いニット帽を被っている。

詳細：式神の城の舞台である第6世界から第5世界ガンパレードマーチにやつて来た小柄な少年。式神の城の【玖珂光太郎】とは親友兼ライバルの様な関係で光太郎が正義の味方を心情にしているのに対して【悪の親玉】を心情にしている。しかし、悪の親玉と言いながらもやる事は小さなイタズラ程度である（笑）

身長が160cmと小柄な為、身長のことにつれるとキレる（笑）

キレると最早、主人公とは思えない程の悪人顔になる（例えば烈火の炎の烈火が怒った時みたいな）

家族関係に関しては不明な点が多い

因みに絶技（魔法）以外にも生物以外の物を収納できる異能【空間倉庫】を持っている

## オリ主紹介（後書き）

今回は、こんな感じでしたが段々増やしていくかなぁと思つてます。

今回で、【式神の城】の事なんかが、少し出てきて分からない人がたくさんのいると思います（汗）

まあ、マイナーなゲームですしね（笑）

【式神の城】はシューティングゲームとしてアーケードや家庭用ゲーム機に発売されたゲームです。

1～3まで出ており、人物関係や世界観が奥深くて作者は気に入っています（笑）

他にも、外伝としてアドベンチャーゲームになつたり、漫画、小説などにも成っています。

文に対しての要望や感想、アドバイスがありましたらドンドン書き込んでください

## 第一樂章『ファーストコンタクト』（前書き）

よひやく、第一話完成です

しかし、書いてもう一捻り欲しいなあとか

もひ少し長く書けたらなあとか

びひしても思ひてしまこます（泣）

まあ、そんな訳で今回は短いですナビビハセ（笑）

## 第一樂章『ファーストコンタクト』

「今日、新しく編入される人ってどんな人なんだろうね？」

5121小隊が間借りしている女子校の校門を歩きながら、ポヤヤンとした優しげな雰囲気の少年【速水厚志】は自分より前を歩く黒髪の少女に言った

「.....」

黒髪の少女【芝村舞】は、振り返ることもなく、ズンズンと歩みを進める

「.....ねえ、ひょっとして怒ってる?」

「…………別に怒つてなどいない……」

…………嘘だ！！

速水はそう思いながらも黙つて舞の後ろをついていく

舞は、不機嫌な顔を隠すことなく、校門をくぐり桜が咲く道を歩いていく

「…………でも、凄いね。編入初日にバスで寝過ごして遅刻。オマケに迷子になつたから向かえに来てくれなんて……」

「…………まったく、あのうつけ者が……」

「? その人と知り合いなの?」

「…………まあな……」

「へえ~、どんな人?」

舞は、進めていた足を止めて振り返り頭を傾げ始める

「…ふむ、どの様な人物かと聞かれると難しいな。…………一言で  
言つと、最前線でまわりを囲む幻獣を自分より背が高いという理由  
で全滅させる様な奴……だな…」

「…………」

人間ですか？と本気で思つ速水くんなのでした（笑）

「ツーーー？」

なかなかショッキングなカミングアウトがあつてから数分後、連絡  
があつたバス停付近まで歩くと、突如舞が走り出した

その先には、自分達と同じ制服に猫の耳の様な形をした黒いニット  
帽を被つた小柄な少年がいる

『ん？……あつーか、舞じやねえかあ……』

「シテ體の少井な、舞に『夙』が付くと『夙輕』にて手を擧げる

『ひめ、』の少井ひこ……

「…………」

しかし、舞は答へる事なく、真っ直ぐ少年へと全力疾走する

『へへ、』

ガチャシ……

『まつ～』

『ウニシ……』

『つ――――?』

「…………何故避けん?」

『何故!…どんだけ理不尽なんだよ!…?念つて早々、眉間に銃を突き付けられて宣言なしに発砲つて、避けなきゃ死ぬわあ!…!(怒)』

「…………普通は避けられないと思つよ?」ボソッ

その光景を見めていた速水が思わず洩らす

「ええい!…うるさい!…!」の大うつけが!…!

手に持つ銃のグリップで殴りかかる芝村

『フツ、そんな攻撃、既に見切つたわあ!…!』

間合いを見極め後ろにバックステップすることで回避しようとする  
クオン

……が、

グニッ……

『ちよ、おまつ……足を踏むつて反そく……（メキヨシ……）ガベ  
ハツ……』

奇声をあげる少年

『…………ツ……………』

グリップがめり込んだ側頭部を押さえながら悶絶する

そんなある意味、アホとしか言い様のないやり取りに速水は睡然としていたが、ハツと自分に帰ると慌てて一人の元へと走っていく

「ちょっと、芝村さん！首はダメだよ……そつちに首は回らないから……！」（焦）

『……ども、ばじめ、まじで、如月クオンドす（泣）』

顔をボコボコに腫らしたクオン

「…………」「」

反応に困り、黙る1組の面々

「ハハハツ：（汗）」

事情を知つており、苦笑いを浮かべる速水

「…………」

不機嫌そうにそっぽ向いた舞

「…………なんだこの状況は…………」

あの後、キッチリと舞にシメられたクオンは、5121小隊のプレハブ校舎へ引き摺られて来ていた

「…………如月は、お前たちとほぼ同年代だが、既に実践経験もある。主に戦車兵、スカウトとして動くから仲良くしてけよ」

「「…………ツー?」」

ヘヴィメタな格好をした女性【本田節子】の言葉に少なからず驚く新人達

まだ、訓練中の自分達とほぼ同年代で既に前線に出ているのだから無理もないだろう

「あんな、チビが（ねえ）！？」

ブチツ

この瞬間、教室内の面々は聞こえる筈の無い、何かが切れる音を確かに聞いた：

『我が

クオンの背後に見える筈のない真っ黒なオーラがコラコラと立ち上る

ガチツ  
：

! ! ! ! !

クオンは、どこからともなく一丁のサブマシンガンを取り出すと、教室内で乱射して暴れだす

## 吹き飛び机

穴が開く壁

『言つた奴は、正直に言え！！今なら、八分殺しにオマケで一割殺しで勘弁してやる！－！』

「それ、もつ普通に殺してんじゃんかよー。（汗）」

頭に「ゴーグル」を付けた少年【滝川陽平】の必死なツッコミを凄まじい程の理不尽さではね飛ばすクオン

『オラオラオラアアー！トリガアアハツピィイー！ヒヤツハアア

— ! ! !

これが、【第5121独立駆逐戦車小隊】と【自称・悪の親玉】と

……如月クオンに身長の事を言つてはいけない……と、  
この時、小隊内ではある一つの暗黙のルールが誕生した

……数分後、暴走したクオンは【若富康光】と【来栖銀河】のスカウトコンビによつて取り押さえられ、本田と舞にキッチリ、シバかれました（笑）

のファーストコンタクト…

## 第一樂章『ファーストコンタクト』（後書き）

…………文才って書いていれば成長するのかなあと本気で思ひつゝ今  
田口の頃です（笑）

題名は、まだ考へ中なので近い内に変更したいと思います

それでは、感想や希望があつまましたらドシドシトモニ

## 第一楽章『出動命令と久しい笑顔』（前書き）

ども、最近イベントやらでドタバタしていた自称・魔法使いです

今回も相変わらず好きに書きまくっています

事故らないと良いけど…

…それでは、どうぞ？

## 第一楽章『出動命令と久しい笑顔』

ある意味、衝撃的なファーストコンタクトから三田が過ぎた日の朝

「今日から三日後のAM05:00に出動命令が出ました」

教卓に立つ眼鏡を掛けた男性【善行】が淡々と告げる

教室内はザワザワする事なく静まり返る

「授業は一時中断。各自、気持ちの整理、訓練、準備、休養と自由に過ごして下さい。以上、解散」

それぞれが席を立ち思い思いの場所へ向かう

『なあ、委員長』

「何ですか、如月君？」

『なんか、今回の出動、意図的なものを感じるんだが気のせいかな?』

「……ああ、どうでしょ?」

『……まあ、良一や』

クオンは踵を返し教室を出ていったとする

「じりじりく?」

『購買部だよ、朝飯まだくつてねえからな』

「せうですか…………如月君、一つお願ひしても良いですか?』

『内容によるな』

「なに、簡単な事です。戦闘班のメンタルケアをお願いします」

『イヤだ』

「即答ですね（苦笑）」

『そんなの瀬戸口とかにやらせろよ、アイツの方が適任だろ？それに、面倒だ』

「そつちが本音でしょ？まあ、実際戦場にも立っていますし、歳も近い方が良いでしょ。お願いします」

『……………気が向いたらな』

「ええ、それで構いません」

クオンはその声に答えるかのように片手をヒラヒラと振り、教室を出ていった

ガラガラ…

『「ひーす、石津居るかあ？また、来たぞー』

小隊の詰所の立て付けの悪いドアを開けクオンが中に入っていく

その手には、大量の焼きそばパンが握られている

「…………また…きた……の？…」

部屋の中央に置かれた大きなテーブルで黒くややウエーブがかつた  
髪に赤いカチューシャを付けた少女【石津萌】がたどたどしく小さな声で言つ

『「まあな、皆が暗い雰囲気で訓練しててなあ、こっちが参っちゃつよ…………そんな事より、飯食うからお茶淹れてくれよ』

「…………」口クリ

石津がポットからお湯を出し、お茶を淹れる

ガラガラ…

ドサッ

『ふう～』グター

クオンは、パソコンの前にある可動式のイスを引っ張つて来て座り、テーブルにダレる

「…………」「コトリ

『ん、サンキュー』

揚々と目の前に置かれた緑茶を一口飲む

『ズズズ……、ふはあ～…、やつぱ緑茶はつめえ～な』

その後、大量にある焼きそばパンを一つ掴みパンツと開ける

『ムグムグ……、石津は今度の出撃どつ思つんだ?』

「…………」

クオンの問いに石津は黙つて俯いたまま自分が座っていた椅子に座つた

『ハハシ、やつぱり不安か（笑）』

「…………な……ぜ……？』

『あん？』

「…………なぜ…………笑つて…………いら…………れるの？…………死  
ぬ…………かも…………しれな…………い…………のに…………」

『なんだ、そんな事がよ。俺は死なねえし、負けねえからさ（笑）』

「…………」

『……ハグ…………ビツセ、今日は出動と壇つても所詮は初陣だ。小物共  
ぐうこしか置ねえよ』

パンツと更にもう一袋焼きそばパンを開ける

『…………ムグムグ…………そんな小物風情が何兀掛からうが俺は殺せねえ  
よ』

「…………み…………んな…………は?」

『あア?他の連中か?』

「…………」口クリ

『ん~……、他の連中がどうなるつどどうでも良いんだが…………。まあ、死なせねえと思つぞ?俺の負担が増えるし…………』

『だかりよ~…………』

ポン

クオンが腕を伸ばし石津の頭に手をおき撫でる

石津の体がピクッと強張る

『……そんなに暗くなるな。お前が暗くなつたら俺がここで飯を食つ意味が無くなるだろ』

「……」口クリ

強張つていた石津の身体から力が抜け、表情も柔らかくなる

そこには、もう先程までの暗い影はない

『ククツ、じゃあ、帰つてきたら屋上でデカイイベントでもやるか。ただし、素敵過ぎて俺様に惚れるなよ』

「……」

『……すまん、今のは俺も恥ずかつた

/ / /

それから、暫く一人は他愛もない話をしながら（主にクオンが話を  
して石津が相づちを打つだけだが……）時間を過ごした

『ん？ やベツ……』

日が高く昇った正午にふとクオンが呟いたと同時にそれは来た

ガラガラッ！

「クオン……昼飯にするぞ……！」

ドアをピシヤリと開けて入ってきたのは舞だった

『……もう、そんな時間か？ てか、よく俺の居場所分かつたなあ。盗  
聴器でも付けてんのか？』

クオンの冗談混じりの言葉に舞の口は泳ぎ出す

「い、いや……そ、そんな事は無いぞ？ ……（汗）」

『……頼むからどうぞ。怖いから……（汗）』

クオンは、椅子から立ち上がりまだ何個か余っている焼きそばパンの一個を取ると……

『石津、コレ余ったから一つかあるよ』

石津に投げて寄越した

『じゃあ、行いつば。何処に行へんだ？』

「つむ、味のれんだ

『あいよ、さつひあか』

舞は頷くと先に部屋を出ていく

その後を追つて数個の焼きそばパンを持つてクオンは出でていく

『じゃあな、石津。またお茶淹れてくれよ』

ガラガラ……バタンッ！

一人になり、静かになつた詰所で石津は自分の手の中にある焼きそばパンを見ていた

ふと、クオンに撫でられた事を思い出す

あの不器用で荒っぽいけど優しい暖かさに胸の鼓動が早くなる

顔が熱くなり、自分でも赤くなっている事が分かる

あの不器用な【優しさ】が石津にとって、衝撃的だった

かつて、酷いイジメが原因で対人恐怖症になり、まともに会話する事が出来なくなっていた自分に初めて気軽に【会話】してくれる優

しい人…

「…………」

ふと、詰所にある鏡に田が行く

そこには案の定、首まで真っ赤になつた自分の顔が[写つ]ていた

微かな笑みを浮かべて…

そつと、自分の手の中にある焼きそばパンを見る

「…………わ…わ…ひゃ…ク…オ…ン…君…」

心に染み渡る様に、彼の名を呟きパンッと袋を開ける

一口、口にすると更に笑みが深くなる

「…………わいし…い…」

その満面の笑顔は、何年も見ることがなかつた【綺麗な笑顔】だった



## 第一楽章『出動命令と久しい笑顔』（後書き）

…………あれ？

何かこの様子だと戦闘がまだ先になりそうだなあ（汗）

てか、今回は戦車組ではなくまさかの【石津萌】の登場でしたね

しかも、何やら今後も主人公と絡んでいきやうな空気…………

まあ、仕方なくのんびり好き勝手に書いていきます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7464x/>

---

高機動幻想ガンパレードマーチ～風を渡る悪の親玉(ラストボス)～  
2011年11月30日21時50分発行